

竹生島

禪竹作

前

ワキ 官人

ワキヅレ 隨行者

シテ 漁翁

ツレ 女

後

ツレ（天女） 弁財天

シテ 龍神

季は 地は 三月 近江

「竹に生るゝ鶯の。 く。 竹生島詣いそがん。

「そもそもこれは延喜の聖代に仕へ奉る臣下なり。
さても江州竹生島の明神は。 靈神にて御座候ふ間。
此たび君に御暇を申し。 唯今竹生島に参詣仕り
候。

道行 「四の宮や。 河原の宮居末はやき。 く。 名も走井
の水の月。 くもらぬ御代に逢坂の。 関の宮居を伏
し拝み。 山越ちかき志賀の里。 鳩の浦にも着きに
けり。 く。

詞 「急ぎ候ふほどに。 鳩の浦に着きて候。 あれを見れ
ば釣舟の來り候。 しばらく相待ち便船を乞はゞや
と存じ候。

シテサシ 「おもしろや頃は弥生の半なれば。 波もうらゝに海

のおも。

ツレ 「霞みわたれる朝ぼらけ。

シテ一聲 「のどかに通ふ船の道。

二人 「憂きわざとなき心かな。

シテサシ 「これは此浦里に住みなれて。明暮はこぶ鱗の。

二人 「数を尽して身一つを。助けやせんとわび人の。隙

も波間に明けくれて。世をわたることぞ物うけれ。

下歌 「よしく 同じわざながら。世にこえたりな此海の。

上歌 「名所おほき数々に。く。浦山かけてながむれば。

志賀の都花園。昔ながらの山桜。真野の入江の船
よばひ。いざさしよせて言問はん。く。

ワキ詞 「いかに是なる船に便船申さうなふ。

シテ詞 「これは渡し船にてもなし。御覧候へ釣船にて候ふ
よ。

ワキ 「こなたも釣船と見て候へばこそ便船とは申せ。これ
は竹生島にはじめて参詣の者なり。誓の船に乗
るべきなり。

シテ 「げに此所は靈地にて。歩みを運び給ふ人を。とか
く申さば御心にも違ひ。又は神慮もばかりがたし。

ツレ 「さらばお船を参らせん。

ワキ 「うれしやさては迎の船。法の力とおぼえたり。

シテ詞 「けふは殊更のどかにて。心にかゝる風もなし。

地 「名こそさゝ波や。志賀の浦にお立あるは。都人か
いたはしや。お船にめされて浦々をながめ給へや。

地 「処は海の上。く。国は近江の江にちかき。山々
の春なれや。花はさながら白雪の。ふるか残るか
時しらぬ。山は都の富士なれや。なほさえかへる

春の日に。比良の嶺おろし吹くとても。沖こぐ船
はよも尽きじ。旅のならひの思はずも。雲井のよ
そに見し人も。同じ船に馴衣。浦をへだてゝ行く
ほどに。竹生島も見えたりや。

シテ 「緑樹かげ沈んで。

地 「魚樹にのぼるけしきあり。月海上に浮んでは。兎
も波を走るか。おもしろの島のけしきや。
舟が着いて候ふ御上り候へ。

ワキ詞

「あらうれしややがて神前へ参り候ふべし。

シテ 「この尉が御道しるべ申さうするにて候。これこそ

弁財天にて候へよくく御祈念候へ。

ワキ 「承り及びたるよりもいやまさりて有りがたう候。

不思議やな此島は。女人禁制とこそ承りて候ふに。

あれなる女人は何とて参られて候ふぞ。

シテ 「それは知らぬ人の申しごとにて候。かたじけなく

も此島は。九生如来の御再誕なれば。殊に女人こ

そまるるべけれ。

ツレ 「なふそれまでもなきものを。

地 「弁財天は女体にて。く。その神徳もあらたなる。

天女と現じおはしませば。女人とて隔てなし。たゞ
知らぬ人の言葉なり。

クセ 「かゝる悲願をおこして。正覚年ひさし。獅子通王

のいにしへより。利生さらに怠らず。

シテ 「げにくかほど疑ひも。

地

「荒磯じまの松陰を。たよりによする海人小舟。わ

れは人間にあらずとて。社壇の扉をおしひらき。

御殿に入らせ給ひければ。翁も水中に。入るかと

見しが白波の。立ち返りわれは此海の。あるじぞ

と言ひすてゝ。また波に入らせ給ひけり。 (中入)

「御殿しきりに鳴動して。日月ひかりかゝやきて。山の端出づる如くにて。あらはれ給ふぞかたじけなき。

天女

「そもそもこれは。此島に住んで神をうやまひ国をまもる。弁財天とはわが事なり。

地「その時虚空に音楽きこえ。／＼。花ふりくだる春の夜の。月にかかる乙女の袂。かへすぐもおもしろや。 (舞)

地「夜遊の舞楽も時すぎて。／＼。月すみわたる海づらに。波風しきりに鳴動して。下界の龍神あらはれたり。龍神湖上に出現して。／＼。ひかりもかゝ

やく金銀珠玉を。かのまれびとに捧ぐるけしき。

ありがたかりける奇特かな。

シテ
「もとより衆生濟度の誓ひ。

地
「もとより衆生濟度の誓ひ。様々なれば。或ひは天女
女の形を現じ。有縁の衆生の諸願を叶へ。又は下
界の龍神となつて。國土を静め誓ひを現はし。天
女は宮中に入らせ給へば。龍神はすなはち湖水に
飛行して。波を蹴立て水を返して。天地に群がる
でぞ入りにける。